

かゝる混亂せる思想と誤れる論理と事實の製造との上に立てるが故に一として余を承服せしむる所なくして、余をして屢學士の反省を求めしめるに止つた。

最後に附言する、學士にして此の如き用意と此の如き論理の上に立たるゝ間は、學士との間に幾度論争を重ねるも學問の進歩に何の貢獻もあり得ない、徒に勉學の時間を空費する許りである。學士にして相當の用意をなし、其論理を改造し、事實の製造を斷念せらるゝまで、而して自ら狂犬の如しと稱せられたる態度を改めらるゝまでは再び學士に對する論争の筆を執らない積りである（大正八年十月二十五日）。

學界近況

ドイツセン教授逝く 一八八九年以來今日に至るまで二十一年間、獨逸キール大學の教授として哲學を講じ、特に印度哲學のために心血を盡ぎ、世界の學界を刺戟し貢獻しつゝ、あつた老大家パウエル・ドイツセン教授 (Paul Paul Deussen) が七十四歳の老齡を以て本年六月の頃、浪荒き北海の岸邊に永への眠りに就かれたといふことを朝永先生から聞いたのはつい最近の事である、その長逝が何日の出来事であつたか確かに知る事が出来ないのは甚だ遺憾に思ふが、併しケルンで發行せる Kölnische Zeitung の七月十一日號にその訃が報せられて居るのを見ると恐らく七月上旬であらう。

教授が哲學否印度哲學研究者としてその名聲を世界に博して居る事に今改めて言ふまでもない、苟も印度哲學に志を傾けんとするものにして未だ教授の名を知らぬものは恐らく無からう、專攻の學生はその研究の初めに當りて教授の著書中、最も一二部は必ず先づ讀破せねばならぬとさへ言はれて居る位である、特にかの「一般哲學史」や「六十優波尼沙土」等の如きは實に學界稀に見る大著であらう、教授の學說が本邦印度哲學研究者に及ぼし尙及ぼしつつある影響は亦決して尠くはないと思ふ。

教授の哲學一般に關する學說は多く、シヨールペンバウエルの學說

に基いたものであつて、かの「形而上學原論」の如きは殆んど全くシヨーベンハウエル學說の祖述と言つてもよいのである。姉崎博士が親しく教授に師事し梵語や印度哲學を研究せられたと共に始終聞かれたものも亦シヨーベンハウエルの哲學であつたと云ふ事である、又シヨーベンハウエル全集の出版は主として教授の盡力に依つたものである、姉崎博士の譯「意志と現識としての世界」も實は教授の刺戟により、博士と教授との約束を遂行せられた結果であると聞いて居る、シヨーベンハウエルと教授との關係は總ての點に於て實に密接なものであつた、教授が中年生涯の事業として印度哲學に志を向けられたのは大に所以ありと思はれる、勿論ニーチエの功勞を忘れてはならぬが。

かの「形而上學原論」を見るに、開卷第一先づ權威ある聲句として、聖婆伽梵歌の宇宙本體諦觀及び解脱地到達の句を掲載せるが如き、既に早くそして如何に深く教授が印度思想を憧憬して居たかといふ事實を示すものと言つてよと思ふ。

抑も教授はその印度思想の中にシヨーベンハウエルの形而上學的根本思想を見出したのであつた、世界に於けるすべては *material* である、併しながらその所謂 *material* Welt は意識の形式に依りて制限せられたる現象に過ぎない、謂はゞ夢の如きものである、眞の實在は空間時間因果關係によりて拘束されないものである、而してシヨーベンハウエルに隨へば、その實在の最後の本質を解すべく經驗的概念的修飾は全然力なきものであつて、必ずや經驗全體を洞觀し得る直覺的眼光がなくてはならない、そしてそ

の直覺的眼光は畢竟するに意志である、そして人間は *Welt als Vorstellung* の一員に過ぎないのであるから「^{ハカイバ}一而全」なる原理によりてこの現象世界はその内部の本性よりすれば一々の時と處に於て遂に同一でなくてはならない、隨つて悟性認識が經驗よりして得能はる *Ding an sich* は即ち意志である。現象の世界は即ち *Welt als Vorstellung des Willens* であると言ふのである、茲に於てか物理學的世界考察の最後の結論が *alles ist Willie* となると同時に形而上學的世界考察の最後の結論が *alles ist Willie* となつたのである、そしてその所謂意志は世界若しくはその個々なる物の原因であると呼べるべきでなく、寧ろそこに現はれ、そこに *Vorstellung* の對象となる所の本質である、教授はその所謂 *Ding an sich* としての意志を考察して思へらく、雑多はすべて

時空の拘束を受けるが *Ding ansich* としての意志は然らず、たとへその意志が時空に於ける現象中より雑多として顯現する事がありとしても、その場合の意志はその雑多とは自ら性質を異にせるものであつて意志そのものゝ與り知らざる所である、雑多は之を分切する事を得るが *Ding an sich* としての意志は不可分のものである、その意志が顯現するに際して恰もそれが分切されて居る如く觀察さるゝ事があるが、併し實はその顯現の各がその意志を全體として保持して居る事を知らなければならぬ、元來外界に於ける事相の各が全體的なそして不可分的な、シヨーベンハウエルの所謂 *Wille zum Leben* の一顯現であつて、猶ほ水面に映ずる千百月光の各が完全なる月の反射であるが如きものである、聖婆伽梵歌には既に

Ayibekhtun ca bhutesu Yibhaktam iva ca Sthitum.
と歌はれてゐる。又 Ding'an sich としての意志は因果關係にも拘束されないものであつて、隨つて Grunntos であり Frei である。謂はつゝ "überwältigende Kraft" であり ein Etwas であつて、眼も見る事能はず、如何なる名も之を示す事能はず如何なる概念も能く達する所ではない、若し之を假りに神と名け得とすれば、その神は遂に一切拒否の原理たらざるを得ないのである、而して吾人がその神に體達する唯一の方法は内的假験の境地 "Inttwardni" 或は "aham brahmi asmi" を味得し依りて以て涅槃を證覺するにありと。

私は今教授の學說を論述する場合ではない、只教授の計を悼み之を報告すれば私の任務は果されるのである、教授の學說や哲學史上の位置などに就ては之を他日に譲り度い、以上は教授とシヨ一ペンハウエルとの關係を少しく紹介せんがために大海中より僅かに牛跡の水を汲んで見たに過ぎない。

教授の父は獨逸ノイゼード區オーベルドライス村で四十年間教師として活動して居た、鬼オフリードリヒ・ニーチエが生れて八十餘日目、一八四五年一月七日教授は其處で呱呱の聲を擧げた、教授がニーチエと初めて相見えたのは一八五九年の秋、教授十四歳の時 Landes-Schule-Flora でニーチエと同級同組となつた時であつた、爾來二人は生涯の友として君僕の交際を續けた、若しニーチエを剛膽不羈の鬼才と言ひ得るならば、教授は篤實周到な

學者と名け得らざらであらう。曾て教授とニーチエとは出遊を約した事があつた、曾教授はホラチウスの書を読み興に堪えず、ニーチエの誘に應じながつた、ニーチエ怒りて「咄！徒ら、勉學して師の意を迎へんとするか」と罵倒した、教授赤面し業を廢して之に従つたといふ事である、ニーチエが中學卒業の時數學の成績甚だ佳からず、ために失望落膽懊惱の情に堪えなかつた時を除いては常にニーチエは教授に對し學兄を以て自ら任じて居た觀がある。又後年兩友相見ざる事六年、一週日の暇を得て教授はパーゼルに在るニーチエを訪問した時、互に久闊の情を述べて日の移るを憚えず、ニーチエは頻りに休暇の延期を勧めたが、教授は終に義務を重んじて歸つた、後ニーチエは書を送りて會期の短かりしを悲しみ且つ些少なる學校の義務のために友誼の大義務を怠りし事を責めて居る。

教授とニーチエとの關係を知る材料は色々あらうが、「ニーチエの書簡集」に載録されたる教授宛の夥多の書簡及び今より約二十年前に教授によりて發行せられたる「ニーチエ追想録」(Einnerungen an F. Nietzsche) などはその最たるものであらうと思ふ、又ニーチエの妹によりて著されたるニーチエ傳 (Der Junge Nietzsche) にも兩友の關係が所々に比較的詳細に述べられてある。追想録に就ては哲學雜誌第百七十四號に桑木先生の詳細なそして興深き紹介がある。

今それ等を材料として少しく教授の經歷を辿りて見よう。
一八六四年教授は中學を出て直ちにボン大學に入り言語學を研

究する事になつた、是れより先き教授は神學研究に意を傾けたのであつたが、ニーチエ之を不可とし、連りに言語學研究の要を説き、ライプテヒ遊學を勧めた、然るに教授の兄ヨハンはチューベングンにて神學を研究して居たので連りに弟を誘ふたのであつた。教授疑焦患遂に意を決し兄に従つた、然るに後その豫期に反せるに失望し、再びボンに歸り翌年遂にヘルリンに移りて希臘羅馬の古文研究に従事する事となつた。

その頃教授はニーチエの勸誘に依りてシヨーンペンハウエルを讀したが未だその人生觀に服する事が出来なかつた、後カントを研究するに當りて始めてシヨーンペンハウエルが能くカントを継ぎてその敢て言はざりし所に進めるを悟り終て無二のシヨーンペンハウエル派となつたのである。

一八七一年ヘルリン大學講師の資格を得、ニーチエの勧めによりて一八七二年某露國婦人の私宅教師となり、諸方を遍歴し、閑に乗じてジエニーツにては佛語を以て哲學を講じ、又梵語を研究し、印度哲學に意を動かすに至つた、ニーチエ大に之を賞し、西洋哲學の知識を以て組織的研究に努むるを望んだと言ふ。

一八八〇年私宅教師を辭し、一八八六年婚期の式を挙げ、一八八九年キール大學の教授となり、以て今日に至つた。

而して一八九三年には親しく印度の祭典に列し、歐人として未前の名譽を擡つたと言はれて居る、*Kölnische Zeitung* にも特に之を記して云々——

In einer feierlichen Sitzung von Veda-lehrer und-Schülern im Jahre 1893 nunweit Kalkutta wurde Densson

feierlich vor aller Augen mit der heiligen Offenschmierung übert, eine Ehrung, die sonst wohl kaum je einem Europäer zuteil geworden ist.

教授の著書として私が今までに知り得たるものは大體左記の如きものである。

1. Die Element d. Metaphysik, 1877.
2. Das System d. Vedanta, 1883.
3. Die Sūtras d. Vedānta nebst d. Kommentar d. Gauḍakara, übers., 1887.
4. Kateg. Imperativ, 1891.
5. Allgemeine Geschichte d. Philos.,
 - I. 1. Allgem. Einl. und Philos. d. Veda bis auf d. Upanisad, 1894.
 - I. 2. Die Philos. d. Upanisads, 1899.
 - I. 3. Die mehrvedische Philos. d. Indier, 1908.
- II. 1. Philos. d. Griechen
6. Seelzig Upanisads d. Veda aus d. Sanskrit übers. usw., 1897.
7. Jakob Böhm, 1897.
8. Outlines of Ind. phil.-s., 1900.
9. Erinnerungen an Indien, 1904.
10. Vier philos. Texte d. Mahābhārata, 1906.
11. Die Geheim lehre d. Veda. ausgew. Texte

A. Harnacks, ibers,

12. Der Gesung d. Heiligen,

1907-8.
1911.

尙その外前記「エーチエ追想録」の如きも教授の著書として數ふべく、又教授の手によりて出版せられたるものとしては「シヨーベンハウエル全集」を始めとしてその他にもあるだらうと思ふが、早急筆を取つたためにそれ等を細かに調査する邊を得なかつた事を遺憾に感ずる。

噫、ドイツセン教授は逝きぬ、學界の一大損失たり矣、幾とせ久しく印度哲學のために「毎年毎日最善の力」を傾注せられたるドイツセン教授の長逝を深く學界のために痛み、茲に謹んで悼惜の意を表す。(大正八年十一月日本田義英)

ジムメルに就いて。 ゲオルグジムメルが昨年中に亡くなられたさうである。氏は一八五八年伯林の生れであると云へば六十歳の一生を送られたわけである。精細なる氏の生涯について、また極めて廣汎なる其學說の紹介批評については別に適當なる人によつて述べられる機會のあることを信じてゐる、此處ではとり敢へず氏の學說傾向の輪割のみを未だ氏に親しみない人のために申述べることにして置く。因みに氏は久しく伯林大學教授としてあつたが一八一四年ストラズブルグ大學に轉ぜられた故恐らく同大學在職のまゝ亡くなられたことと思ふ。

認識に關するジムメルの立場は論理的理論的の見地特にカント、ヘーゲルに由來する辯證的理想論的の見地と、心理的發生的の見地とを結合せんとするにある。従つて一方先驗的絕對的であると共に他方は進化的相對的である。氏に由れば認識作用はその中に先驗的要素を含むがそれは(範疇として)一定不變のものでなく已まらず發展して行くものである。認識作用のすべての形式及び方法は人間精神歴史の過程に於て發展し來つたものであるが、然しそれは常に體験の混沌體から甫めて明晰なる統一結合を形成すべき人間精神の規法的活動である。この意味で眞理は次の様な二方面から考察出来る。第一に眞理はカント學派のものが一般に考ふる如く如何なる意味に於ても對象を模寫することによつて成り立つものではない。ジムメルは明かに客觀的に存立するものゝ模寫を否定し、かく否定することを認識批判の確實なる成果と考へて居る。對象について吾人の持つ形像はカントの示したる如く全く先驗的な心理的機能に由つて規定せられるが、氏はこのアップリオリの概念から更に他の非心理的認識論的なアップリオリの概念を區別してゐる。眞理と呼ぶべきものは純論理的なるもの、即ち無時間的絕對的なるもの、主觀的思惟より獨立的なるもの、氏の言葉で云へば心的物的の存在形式より區別せらるゝ「第三領域」觀念的内容の領域(Kreist der ideellen Inhalte)に屬するものである。こゝに内容と呼ぶものは吾等に由つて考へらるゝと否とに關係なく常に眞であるものを意味する。概念、論理的規範、自然法、心理的我から區別せられた客觀的精神の範圍はこれに屬してゐる。それは心理的經過と混同すべからざる「妥當」の存在様式に外なら

ない。この第三の領域の外更に第四の「理想的要求」の領域がある。此處で要求と呼ぶものは單なる主觀的要求を意味するのでなく事實と共に與へられ心と世界との關係に於て豫め規制せられたる「當爲」の義であつてそれを取り扱ふものは超主觀的論理學である。

眞理に對する第二の見地として氏に従へば眞理は生物學的進化論的方面を持つ。眞と呼ぶものは此處では吾等に於て吾等に有用なる状態を引き起すべき表象の義である、各個人を持つ世界形像は各個人の感覺器官の相異即ち精神生理的機構の變化に應じて變化するものである。かく變化し移行するものなるゆへに其間に淘汰が行はれ常に保存に適するやうな表象が他の表象より優秀なる位置を占めそれが合目的な、生命の要求に叶へる行爲の動機として示さるゝ場合に眞となるであつて、此處に於ては眞理と種族合目的性と同一である（氏は一八九五年 *Archiv f. systemat. Philosophie* に公にせる *Über eine Bezeichnung der Schattensseite zur Erkenntnis* に於てかゝる意味のプラグマチズムを唱導し一九〇〇年 *Philosophie des Geistes* 六五一頁以下に最も明瞭に述べて居る）。かくして氏に従へば認識の有効性と云ふものが同時に吾等に向つて認識対象を作り出すのであり従つて相異せる機制及生命慾求の存するに伴つて數多の眞理が存在することになるのである。

次に氏は倫理的範圍に於て規範的倫理學と記述的倫理學とを區別してゐる。前者は理想を建設するもの後者は道德學 (*Moralwissenschaft*) として、價値的立場をとることなしに現存する倫理生

活をありのままに記述せんとするものである。かく倫理學を二範圍に分けた點に就いても明かに一方經驗的なる個々の事實に關する發生的相對的見地をとると共に、他方先驗的理想論的見地をとること及二者を結合統一せんとする氏の企圖を窺ふことが出来る。氏に従へば「當爲」は事實に即して與へらるゝ一の要求、前述せる意味の「理想的要求」として根元的、客觀的なるものである。當爲の内容は變化を持ち社會的歴史的に制約せらるゝとは云へ當爲自らは事實の事實、根元範圍である。道德的善とは幸福の希求に成立するものに非ずして（幸 説への反對）意志發展の直接性質、生存形式に外ならない。或ることが「善」であること云ふのはそれが自ら善良なる意志の内容であると云ふ限りである。道德的命令とは善良なる意志の内面的満足内面的充實である。道德性は意志の内容實質にあるのでなく、意志そのもの、そのものの機能に存するのである。

他方に於て當爲は相異せる内容に即しては錯綜してゐる。目的の統一と云ふことも必然的には定められない、只目的を維持する心理的機能の統一をもつて満足する外はない。社會的に要求せらるゝものが個人行爲の規範となる。良心とは吾等の行爲に就いての種族的快又は不快である。自由意志とは意欲に於て阻碍せることなく實現せられ得る自己性格を意味する。自由とは自己規定であり同時にそれは有るがまゝに有り得るが故に必然性を持つてゐる。責任感はず普通には自由意志より導かれ、様に考へられるのであるが、氏に由れば逆に結果に就いて責任感を持ち得るものが意志自由であり得るのである。

自然は精神に由つて創造せられる、この先験的理想論の見解をジムメルは歴史研究の上に移して従来の歴史家が過去の事實をそのまゝに模寫することを以て能事とせる實在論の見地に反對し歴史の認識に於ても自然科学的真理の認識と同様その中に含む先験的要素の意味あることを主張してゐる。歴史は範疇即ち先験的なる結合形式に由つてのみ可能である。従つて歴史哲學は歴史學の認識論であり、その問とする處は如何にして直接體驗せらるる實在の資料から吾等が歴史と呼ぶべき理想的生産物が構成せらるゝかを吟味することにある。この生産物は氏に從つば體驗せられたる實在の模寫とは全然別異のもので、恰かも自然に於ての如く精神の創造に由らねばならぬ。かくして氏はこの創造が精神の規制の機能即ち歴史的アップリオリに由つて個別的なる歴史事實より完成せらるゝことを示し遂に歴史は事實の模寫でなく、従つて法則を定むることではなく人間精神の「Typen」が事實の理解に際し如何に現れ出づるかを明かにするもの、哲學者の世界觀の如きも其人自らの存在に向つて活きつゝある人間類型(Menschentypen)を現はすものであるとの見地に到達してゐる。氏のカント、ゲーテ、シヨウベンハウエル、ニーチェに關する研究はかゝる精神に由つたものである。

社會學は氏に由れば社會化の形式、人間相互の關係形式に關する純粹形式的な學である。それは社會的生活の内容より離れて恰かも數學者がものゝ實質を措いて形體の性質を見る如く人間の社會的存在を研究する學であると云ふ。

氏の著作を擧ぐれば

- Das Wesen der Antike nach Kants physischer Monologie, 1881.
 Ueber die Grundfrage des Positivismus, z. f. Philos. n. Phil. Nr. 90.
 Ueber soziale Differenzierung, 1890 z. A. 1906.
 Zur Psychologie der Frau, Z. f. Volkpsychol. 1890.
 Die Probleme der Geschichtsphilosophie, 2892 z. A. 1905.
 Einleitung in die Monismussenschaft, 1892-93 z. A. 1904.
 Das Problem der Soziologie, 1891.
 Skizze einer Willenstheorie, Z. f. Psychol. Bd. 9.
 Beitrag zur Erkenntnistheorie der Religion, Z. f. Philos. n. phil. Nr.-Bd 118.
 Ueber eine Beziehung der Selektionstheorie zur Erkenntnis, Archiv f. systemat. Philosophie 1895.
 Philosophie des Geldes, 1900. z. A. 1907.
 Vorträgen über Kant, 1903. z. A. 1913.
 Die Religion, 1906.
 Schopenhauer und Nietzsche, 1909.
 Soziologie, 1908.
 Hauptprobleme der Philosophie, 1910. z. A. 1913. Goethe, 1913.
 (以上主として Eisler, Philosophische Lexikon 及び Ueberwegの哲學史第四卷に由る。著者自作)

カツシラー エルザスが佛國支配の許に置かるゝ結果ストラ
スブルグ大學げケルンとハンブルグとに半分づゝ移しハンブルグ
の哲學教授としてカツシラーが招聘せられたとのことである。

彙報

京都哲學會秋期公開講演會

京都哲學會は十月十九日午後一時より法學部第一教室に於て秋
期公開演會を開き、左の講演あり。

道德と幸福との關係に就いて

文學博士 藤井健治郎君

北米の國王と其の美術

文學博士 松本亦太郎君

右講演後學生集會場に於て松本博士歡迎の晩餐會を開き、狩野
文學部長を初め文學部諸教授、諸學士等廿餘名出席せり。

哲學倫理會例會

十月二十二日午後七時より田邊博士並に新入學生の歡迎を兼ね
て例會を開き、席上田邊博士のクラシックに對する感想、波多野
博士の哲學者の態度に就いての所感、菊地君のプラトンのファイ
ドンについての話、吉田君の感想等ありて盛會、西田朝永波多野
藤井田邊諸教授米田講師、阿部黒田勝部久保務臺三宅の諸學士其

他學生出席せり。

心理學讀書會例會

○十月十六日

J. Tolson, Experiments in Rational Training.

文學士 岩井勝二郎君

○十月二十三日

The Ziehen, Grundlagen der Psychologie.

文學士 千葉胤威君

○十月三十日

N. Aoh, Über die Willenshaftigkeit und das Denken

大脇義一君

○十一月六日

普通及び特別學級に於ける優良兒の比較

文學士 稻崎淺太郎君

印度哲學宗教學會

十月十四日例會を開き左の講演あり

寺本 講師

楠教授、羽溪赤松島越手島本田諸學士、學生出席。

社會學會

十月二十七日午後六時より學生集會場に於て左の講演を開けり
街路計劃と街路の規格 重永 潜君